

スタア

おれの血は他人の血



筒井康隆全集 15

おれの血は他人の血
スタア

新潮社

おれの血は他人の血・スタア



筒井康隆全集 第15巻

昭和五十九年六月二十日 印刷
昭和五十九年六月二十五日 発行

定価一五〇〇円

著者 筒井 康隆

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一(千一六二)

電話 業務部 東京(〇三)二六六・五一

編集部 東京(〇三)二六六・五四

振替 東京 四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

簡井康隆全集第十五卷・目次

長 篇

おれの血は他人の血……………7

戯 曲

ス タ ア……………139

短 篇

講演旅行……………211

モケケ^{II}バラリバラ戦記……………248

日本以外全部沈没……………226

通いの軍隊……………258

だばだば杉……………237

エッセイ

娯楽小説……………279

ソ連・東欧への旅……………281

解説

新しい部屋で……………	284
取り持ち酒・怒り酒……………	285
トモさんの思い出……………	287
いずれは LPもなくなり……………	288
結婚——不運と幸運……………	289
執筆五分前——読み返している……………	292
ああマジメ人間……………	294
あるエネルギー……………	295
細部のものすごさ……………	297

新戸雅章 351

食事論断片……………	298
紙不足による不安感……………	300
インタヴューアー心理……………	302
NULL復刊のことば……………	304
SF界若手養成へ……………	306
漫画修業……………	307
山下洋輔小論……………	309
小松左京論……………	311
二〇〇一年 暗黒世界のオデッセイ……………	320

おれの血は他人の血・スタア

装
幀

山
藤
章
二

長
篇

おれの血は他人の血

いやな予感がした。

その三人組が店へ入ってきた時からだ。彼らの服装を見て、彼らがやくざではないと判断する人間がいたらお眼にかかりたいくらいのものだ。彼らはそれぞれ三種類のやくざの典型だった。

だから三人が、おれのまうしろのボックスで悪ふざけをはじめた時も、おれはカウンタ―に顔を伏せるようにして背を丸め、バック・バーの前に立っている房子と、気まぐれビールのやりとりをしていた。

裏通りのバーによくある、奥へ細ながい店だ。黒ラッカ―でざらざら光るちいさなドアを押して入ると右側がカウンタ―で、こっちはパイプの椅子が十本並んでいる。左側には六人掛けのボックス席が三つ続いている。

カウンタ―とボックス席の間の通路は、チーク・ダンスができる程度の幅しかない。それでもこの町の裏通りのバーとしては、これでも広い方なのだ。

照明は比較的明るいのに、女たちはいずれも暗い感じが

する。女たちというのはママを含めてのことだ。もつとも、おれは明るい健康的な女というのは眩しすぎて性にあわないから、その方がいいわけである。

女たち五人の中でもいちばん暗い感じがするのはカウンタ―の中にいる房子で、だからおれは彼女がいちばん気に入っている。顔立ちと表情は妖婦を思わせるが、からだつきの方は男っぽくて胸もべしゃんこだ。声はアルトで、せりふまわしはぶつきらぼううだ。ところが客に向かって喋るぶつきらぼううなせりふをよく聞いていると、不思議なこと

にちゃんとお世辞になっている。少なくとも馬鹿ではない。おれがいつもカウンタ―にかけるのはこの房子と話すためでもあるが、もうひとつの理由はおれが安サラリーマンだからである。ドアに近いところにかける理由は、ビールしか飲まないため遠慮しているのだ。つまりおれのまうしろの三人組は、入ってきてとっかかりのボックス席を占領しているのだ。

いちばん小さい男が三人組の兄貴分らしいが、この男の声はあまり聞こえないからたいした悪ふざけはしていないらしい。その方が凄みと貫禄を出せると思っているのかもしれない。あるいはあとのふたりの暴れかたに圧倒されているのかもしれない。

暴れているうちのひとりが、ひと眼で酒乱とわかる赤ら顔の大口、片方がプロレスの悪役まがいにつつろの金壺

眼、身長二メートル弱という非人間的な男だ。いちばん若い蘭子という女がこのふたりの間にはさまれて、さんざいたぶられていた。一見女子短大在学中といった上品さが、彼らふたりの野卑な嗜虐欲をそそののさだる。

おれはビールのグラスを握りしめ、中身を睨み続けながら低い声で房子に訊ねた。「連中、いつもくるのかい」

「はじめてよ」房子は唇をほとんど動かさずに答えた。

それから、おれが注いでやったビールを、眉をしかめて飲みほし、俯向いた。

溜息とともに、唇の端から声を洩らした。「可哀そうだわ。蘭子」うわ眼づかいに、ちらとおれを眺めた。

あなたじゃ、とても無理ね、なんとかしてやってほしいんだけど、彼女の眼がおれにそう語りかけていた。おれはその通りだよ、という眼を彼女に向けた。そうだよ、おれじゃどうにもならないよ、そういう視線で彼女に答えた。彼女は下唇で、そうね、といった。

おれの身長は一メートル六十九だから、日本人としての標準に近い。だが瘦せぎすで肩の骨が尖っている。だから貧弱に見える。誰の眼にもそう見えるだろうし事実そうなのだが、平凡で、善良で、小心で、あまり有能でないサラリーマンだ。やくざの三典型をたしなめたりする度胸はない。まして喧嘩など、できるわけではない。そして彼らをたしなめれば当然喧嘩になるのだ。おれが彼らとの喧嘩に勝

てるだろうなどと、房子が思う筈はない。房子以外の誰だって、そう思う筈はない。そんなことを思うやつはいない。「あつ。いやです。やめてください」蘭子が悲鳴をあげた。「あつ。いやです。やめてください」卑猥に蘭子の口真似をして、赤ら顔がげらげら笑った。

「あつ。ママ、助けて」

「あつ。ママ、助けて」

「いや。いや」

「いや。いや」げらげら笑った。

店内装飾の経費を切りつめたらしくて、この店のバック・バーには鏡がない。振り向かない限り、おれの方からは連中がどんなことをしているのかわからない。もちろんおれは振り返ったりしない。

喧嘩に勝てるかどうかはともかく、おれには蘭子を助けてやらねばならぬ理由はまったくない。この店へやってきたのは今夜でたしか五度めである。いつもひとりやってくる。その都度金を払っている。たいした金額ではないが必ず払っている。この店の女のうちの誰かに惚れているというわけでもない。房子にだけは愛用の万年筆に対する程度の興味を持っている。だから惚れているわけではない。むろん抱きたいと思ったことはある。他の万年筆よりはおれの愛用の万年筆を使いたいと思う。つまりそれと同じことだ。

おれがこの「マーチンズ」というバーへくる理由は、おれの会社の連中が、ここへはこないからだ。同僚、上役、気のあうやつはひとりもないし、おれはひとりで酒を飲むのが好きだ。景気のいいおれの会社の連中、特に営業、現場関係の連中は、得意先や下請先の人間と一緒に、どのバーへ行ってもひとりやふたり必ずいる。といつてもこの町のバーは全部で三十軒足らずだが。

「マーチンズ」は開店してまだ間がないから客も少なく、そして今夜までは、他のバーへ行くと必ずお眼にかかれるような、この町のやくざたちもこなかったのだ。やくざがこないということも、おれが「マーチンズ」にくる理由のひとつだった。

蘭子がまた、悲鳴をあげた。

「まあ、そんな可哀想なことを。ねえ、もう堪忍してやってくださいな」ママがおずおずとそういった。ママも連中のボックスへひきずりこまれているらしい。

「なんだ。したっていいだろ」プロレスの悪役が、鈍重な声でゆっくりといった。「男がこういうことをするために、女を置いてるんだらうが」

そうではないといえ、どういつてからまれるかわからないので、ママは黙りこんでしまった。連中の悪ふざけはますますその度を加えはじめた。時間はまだ早い。だからまだ客も少ない。店内の客はおれと三人組、それにおれよ

り早くからきていちばん奥のボックスでビールを飲んでる貧相な中年男、全部で五人だった。

五人いる女のうち、ひとりはまだ出勤していないか休んでいるかどちらかで、残りのもうひとり、夏江という女は、中年男にかじりついたまま、おびえの色を眼にあからさまにして三人組のボックスをちらちらとうかがっている。

三人組の不満は、女の数が少ないことに理由があった。

この町は新興都市で、だからこの町のバーはいずれも店の広さや客の数にくらべ、ひどく女数が少ない。だいたい男のバーテンさえ、かぞえるほどしかない。

布地の裂ける音がした。

蘭子がすすり泣きはじめた。

帰ろうか、と、おれは思った。だが、帰るきつかけがつかめなかった。

「ね、お願いですわ。よしてやってくださいな」ママがふたたび、泣かんばかりの口調で懇願した。「どうしてそんなに蘭子ちゃんばかりいじめるのです」

「蘭子ちゃんばかりだつて。他に女がいるのか」赤ら顔が詰った。「それともママ、お前もいじめてほしいのか」

ママは沈黙した。

「よせやい」ママをいじめては具合が悪い、さすがにそう判断したのか、小男が笑いながらいった。「こんなばあ、いじめたって面白いくない」

「ま、ごあいさつね」ママが笑った。

顔を歪めた彼女の作り笑いが、おれにははっきりと想像できた。

蘭子がひっと叫んだ。

何をされたかは想像にあまりあった。房子が顔色を変えたからだ。

ママが小男に頼んだ。「ね、やめてくださるように、お兄さんからこのかたたちにいつてくださいな」

「女の子が足りねえんだよ。たったひとりじゃなあ」小男は面倒臭げに答えた。「お前みたいなばあは女のうちに
は入らない。そうだろ。だとしたら女一人に男が三人だ。
いじめたくもならあ。だって男はそういう時、女をちやほ
やしたりしねえ。女をいじめるんだ」

ママは、しばらく黙っていた。

やがて彼女は、カウンターの房子に声をかけた。「房子
ちゃん」

房子が、身をこわばらせた。

「お願い。このボックスにきて頂戴」

房子は、はつきり答えた。「いやよ」

たまたま有線放送の音楽の途切れめだったから、房子の
声はやけに大きく響いた。

店内が一瞬、しんとした。

赤ら顔だかブレスだかのどちらかの立ちあがる気配が
した。

ママがあわてて、もう一度房子にいった。「どうしてい
やなの。こっちへきて頂戴。お願いよ」

返事をしてからずっと顔を伏せたままだった房子が、頭
を起してまともにボックスを睨み据えた。「だってわたし、
絹川さんのお相手してるのよ」

ついにおれの名前が出た。いやなごたごたにひきずりこ
まれるだろうと思い、おれはげっそりした。

また、全員がしばらく黙った。

「この店じゃ、カウンターの客にも女がサービスするの
かい」やがて小男が、さりげない調子でママに訊ねた。「そ
ういふのは、女のたくさんいるバーでもなかなかできない
ことだな」

「そうだそうだ」通路に立ちあがった様子の赤ら顔がいっ
た。「カウンターの客よりは、ボックスの客が偉いんだ。
なあ、そうだろ」彼はよたよたとおれの傍へやってきて、
カウンターに脇をつき、房子を見つめた。「ボックスの客
の方が偉いんだぞ」

房子が顔をそむけながらいった。「わたしはバーテンと

して雇われているのよ」

熟柿（じくし）のような臭いは、おれの鼻の奥も突きあげた。

赤ら顔は房子のことばを聞いていなかった。「カウンターの客なんかにサービスすることはないぜ。さ、姐（あね）ちゃん、来なよ」カウンター越しに、房子の二の腕を掴（つか）んだ。「くるんだよ。さあ」

房子はその手を、振りはらおうとした。

赤ら顔の脇が、おれの前のビールのコップを押し倒した。

おれはハンカチを出し、ゆつくりと背広の袖口を拭った。

赤ら顔はおれの動作をじろりと横眼で見た。それから、おもむろにおれの方へ向きなおり、世にも奇妙な動物を見る、といった眼つきでおれに笑いかけてきた。

「なあ。お前、どう思う」しばらくおれの顔を眺めまわしてから、彼は詫（わ）びようともしせずに話しかけた。「カウンターの客には、女のサービスなんて、いらねえだろ。な、そうだろ。おいおい、返事ぐらいたらどうなんだよ」

おれの口の中には、苦いものが拡がった。落ちつけ、落ちつけと、おれはおれの血に向かつて叫んだ。怒るな。怒ってはいけない。怒ってはいけないのだ。

だが、フィルターを一枚ずつ重ねていくように、眼の前がじわりと暗くなっていくのを、おれはどうすることもできなかった。指さきがどうしようもなく顔（おもて）えはじめていた。

「その通りです」と、おれは彼に答え、小さくうなずいた。顔をえている指さきを、赤ら顔に見られまいとするためだった。

おれの反応を、幾分かの期待とともにじっと眺めていた房子が、ありありと失望の色を浮かべて、また俯向いてしまった。

赤ら顔は輕蔑（けいべつ）の色を浮かべた。

失望の色と輕蔑の色に責め立てられたおれの血が音を立てて逆流していた。痙攣（けいれん）に近いほどはげしく顔をえているハンカチを持ったおれの指さきを、もう、赤ら顔の眼から隠しておくことはできなかった。

彼は大つぴらに高笑いをして見せた。「なんだ、こいつ。ふるえてやがら」

そして赤ら顔は、おれの左の顚顚（くらくら）を人さし指で軽く小突いた。

おれの精神とおれの肉体が分離しかけていた。もうだめだと、おれは思った。恐れていた事態がやってきて、おれののしかかってくるのを、おれはどうすることもできなかった。おれの血に成りゆきを委（まか）ねるしかない、おれはそう思った。

おれは肩の力を抜き、眼の前が暗くなっていくにまかせた。その一方ではまだかすかに自制しろ、自制しろと叫ぶ声が、遠くの山脈から聞こえ続けていた。自制できる、な

どといった、そんな、なまやさしいものではないのだと、おれは沙漠の彼方へつぶやき返した。次第に海原を彼方へ去っていくその声が途絶えた時、おれはゆつくりと立ちあがった。そして赤ら顔に向きなおった。

眼を丸くし、息をのんでいる房子。

赤ら顔の意外そうな表情。

それらをちらと見たのが最後だった。眼の前は真の闇となり、そしておれの意識はおれから逃げ去った。

意識が回復してきた。

おれは、何をやったのだろう、こんどはいつたい、どんなことをやったのだろう、眼の前のフィルターが一枚ずつ剥げ落ちて次第に周囲が明るくなってくるにつれ、おれは恐れに似た気持でそう考えはじめていた。

まさか、人を殺してはいまいな。

ママ、蘭子、房子の、恐怖に色蒼ざめた顔が順にあらわれ、次に視野が左右いっぱいに拡がり、急に店内がくつきりと見えはじめた。

カウンター用の太い鉄パイプの椅子がごろごろころがり、バック・バーの酒瓶はほとんど割れ、ソファには血糊がべったりと附着していて、床いちめんビールの泡だらけである。おれが茫然として突っ立っている場所は店の中央、通路のまん中だった。

おれはのろのろと、破壊の跡を見まわした。なぜか三人組の姿は、すでに店内には見あたらなかった。いちばん奥のボックスで飲んでいた、あの貧相な中年男も消えていた。おれはもういちど、ひとかたまりになって店の奥、通路のはずれの便所の入口あたりで立ちすくんでいる四人の女に視線を戻した。

「ひい」

おれが顔を向けるなり、女たちは身ぶるいして抱きあい、おれから眼をそむけた。

彼女たちが恐れているのは、おれだった。それに気づくなり、おれまでが激しい恐怖に見舞われた。だいたい恐怖というものは、どちらかといえば本人にとっては未知のもの、えたいの知れぬものによって呼び醒まされることが多い。未知のものを恐怖する自分の心それ自体におびえるわけだ。ところがおれの場合は、自分のしでかした行為や結果が即ち未知なのだ。自覚せずにやった自分の行動をあとから恐怖するなんてことが、おれ以外の誰にできるか。夢遊病者にはできる。だが奴さんたちは、必ずしも何かおかしなことをしでかすとは決っていない。ところがおれの場合、何かやったという確率は百パーセントなのだ。そういう局面でなければ意識は失わないのだし、だいたい何をやったかは周囲の状況を見ればわかる。

おれはおずおずと女たちに訊ねた。「おれは何をした」